

住宅外壁メンテナンス塗装での品質管理

千葉 尚樹

1. はじめに

塗装することには着色による意匠住付与、下地の保護、そして特別な機能を付与するという三つの目的がある。昨今の住宅においては構造の耐久性も高まってきたことと、建築廃材の低減に向けこれまでスクラップアンドビルドの考えからメンテナンスして使い続ける、いわゆるリフォームの考えが一般的になってきている。

住宅外壁には、窯業系サイディング材、金属サイディング材、木毛セメント板、ALC、コンクリートパネルなど様々な素材が使用され、工場ですでに塗装されたもの、現場で塗装されたものなどある中で、特殊なものを除き、10～15年すると塗装表面の劣化による、ひび割れや変退色、ハクリなどが見られ、仕上げ材の美観回復と素材の保護のために再塗装が必要となる。新築時からは周囲の環境も変わり塗装するにも飛散と騒音対策などの配慮からローラー、刷毛での工法が主体で行われている。

現場での人手によるリフォーム塗装の場合、対象部位を仕様通りの工程で所定の塗布量を均一に塗るということが大切である。実際に行われてはいても、期待より早く劣化したり、不具合が出ないかなど工事依頼側からは最終外観が均一に仕上がってはいても、計画通りの工事内

容で作業が行われたのか判断し難く確認の方法もない。工事完了報告書への確認記録をより精度の高いものにする方法と、如何に塗装品質を確保するかを検討した結果を一つの品質管理手法として報告する。

2. リフォーム塗装の工程記録

工事依頼者への工事内容説明は完了報告書としてまとめられているが、一般的には作業日、作業内容などを写真添付するなどして説明したのものとなっている。その中には材料の使用した実績や各工程の間隔の順守状況などは分かりにくく、必ずしも満足させるものではないのが現状と言える。

今回、施工管理の方法と塗装材料の設定の仕方を工夫することで、とかく品質が曖昧になりがちな、人手による現場塗装工事内容を第三者にも判り易く品質も確保される方法として検討した。

①材料の使用実績を判り易くするために

住宅1棟リフォームするのにどれだけの塗料が必要なものか意外と見えないものである。標準的な規模で屋根、壁を塗装する場合大缶、小缶含めて15缶前後になる。塗装前に一度に並べ、その全体を写真として残すことが必要で、保管場所が許せば、工事現場に一括で配送するなど確認していただくことができる。また、作業終了後には使用した空缶の全部を記録として残すことで使用実績としての見える報告書になっていく。

2010年12月9日受付
CHIBA Naoki